

中馬 街道

木洩れ日に
往時をしのぶ中馬の古道



中馬 馬子唄

馬子は二十六 男のさかり
根羽や平谷の 若衆だよ
吉良見 吹越猿爪越えて
谷の鳴 笹渡りよ

恵那が曇れば 柿野は晴れる
曾木のあたりは 淡霞よ

三国山から 御嶽見れば 六百
今朝もほんのり 淡化粧よ

美濃の大馬鹿 尾張の坂瀬
碓氷峠が なけなよいよ

(土岐市中馬馬子唄保存会より)

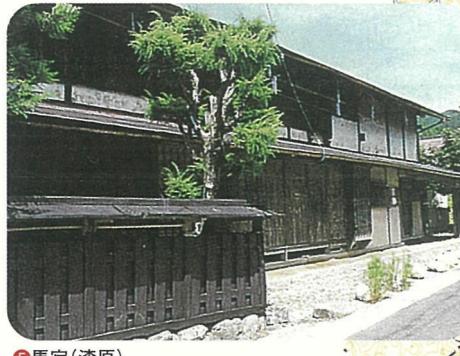
中馬街道

中馬街道は、江戸時代の五街道(東海道・中山道・甲州街道・奥州街道・日光街道)のような、幕府の統制支配の下に、旅人や商人や飛脚や大行列など、様々な目的で様々な人々が通つたいわゆる公道とは違つて、江戸時代の中頃から明治、大正、昭和の初めに渡つて、内陸山間部と都市や海辺を結ぶ生活物資の輸送道路として発達しました。輸送手段は馬と人でした。他の地方で「塩の道」と呼ばれている道に類似しています。



④石地蔵の石仏群(漆原)

周辺の中馬街道は、信州飯田を起点に、阿智、平谷、根羽へと続き、根羽が分岐点となり、一本は豊橋へ、二本目は稻武を通つて足助から岡崎方面と名古屋へ、三本目は上矢作を経由して明智、陶、柿野、瀬戸、名古屋へと繋がっていました。



⑤馬宿(漆原)

根羽から、豊橋方面と足助経由名古屋までの二本の「本街道」に対して、上矢作経由の街道を「中馬脇街道」とも呼んでいます。

花吹雪 浴びて中馬の 馬頭尊

馬と馬子

中馬街道の主人公は、背中に荷物をつけて運ぶ馬と、その馬を追いかけて行きました。その人達のことを「馬子」、「馬追い」、「馬方」、「中馬」等と呼び、その馬追いには、街道の一部を一日か一泊程度で往復する「まくり」と街道全行程、あるいは遠距離を何日もかけて往復する「通し」がありました。上矢作の馬子のほとんどは、明智、根羽、平谷方面への「まくり」でした。しかし、上矢作の街道沿いにも馬子や馬の宿となる「馬宿」が何軒がありました。

使われた馬は、ほとんどが集団性が強くておとなしく、しかも力の強い木曽馬の雌でした。



通常は一綱に2頭~4頭が連なつて歩きました。一頭の馬の背中に付ける荷物のことを「一駄」といい、一駄の重さは70kg~120kgほどでした。重い荷物を背に付けた馬と馬子が、コンビよく息を合わせ、時間をかけて運びました。

峠の奥 一条の白布 滝かかる

運ばれた 生活物資

一駄の荷物の中身は色々でしたが、山間部に向かつては、塩、魚の干物、海藻など

の海の産物や、陶器、金物、木製品などの手工業製品でした。一方、山間部から都市部や海の方面に向かつては、煙草、椎茸、干し柿、こんにゃく、薪炭など山間部の産物でした。

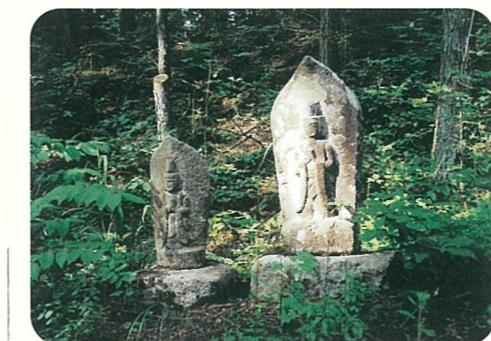


⑥常夜灯(横道)

かけはしの 懸る古道や 虫すだく

面影残る上矢作の 中馬街道

上矢作の中馬街道は、長野県根羽村より大桑峠を越えて町内木地山地内に入り、小笠原、横道、本郷を通り、漆原地内より大馬渡坂を上



⑦馬頭観世音(小笠原)

て、大馬渡峠に至る道程で、町内をほぼ東西に通り抜けています。その距離約12kmです。街道の道沿いには、辻や近くのお宮に常夜灯が立ち、また、街道の要所には「道しるべ」が立ち、各方面の道案内をしています。さらに街道の所々に道中の安全や、途中倒れた馬の冥福を祈つて立てられた「馬頭観世音」が道行く人を見つめています。また最も街道の面影を残す大馬渡坂には、「馬の水の飲み鉢」が置かれ、今も冷たい山水が絶えることなく流れ込んでいます。このように上矢作町の中馬街道には、往時に思いを馳せる光景が随所に見られます。

山風や 馬の水鉢 つらら垂る

街道の役割

中馬街道は生活物資輸送の街道ではありました、同時に馬子達によって街道筋の村々の様子や、時に縁談などが伝えられました。街道は街道筋の文化の情報伝達の道であり、周辺村々の連帯の輪を広げ絆を強める道でもありました。

木洩れ日に 中馬の息吹が

(大馬渡坂を訪ねて)

町内漆原地区の石地蔵より、川下に200mほど下がった所、山手より沢が流れ出ている。その沢に沿つて細い坂道が奥へと続いて見える。ここが中馬街道「大馬渡坂」の登り口である。そこに石柱の道しるべが立ち、その正面左右に、それぞれ「川上ハ志なの」「左ハほうらい道」「右なごや道」と彫られている。

大馬渡峠に向かうこの大馬渡坂は「美濃の大馬渡 尾張の坂瀬 碓氷峠がなけなよいよ」と中馬馬子唄に歌われているほどの大変な難所であった。

なにしろ、登り口から峠まで約1,500mあり、その標高差約350mである。ただでさえきつい坂道である。重い荷物を背にした馬の鼻息

⑧道しるべ(漆原・大馬渡坂登口)

も荒く馬追いたちはあえぎあえぎ峠に向かったに違いない。そんな時、唯一彼らの救いは道中の水飲み場であった。この大馬渡坂には3ヵ所の水飲み場があり、そこには、それぞれ大きな石の上面を深くくりぬいた「馬の水飲み鉢」が置かれている。その「馬の水飲み鉢」に注ぎ込む冷たい山水に、馬も馬追いもどれほどその渇きを癒し元気を取り戻したことか。その一口は



⑨坂中の滝(大馬渡坂)



⑩馬の水の飲み鉢(大馬渡坂)

まさに天の恵みであったに違いない。水飲み鉢をよく見るとその正面と側面には年号や名前が刻まれている。

急な坂道に沿うように流れ落ちる沢の隨所に、時折小さな滝が姿を見せる。小振りな造作だが見事な自然の造形美だ。一時足を止めて眺望する。

途中、坂中の水車小屋跡地で一息入れる。ここは別世界である。沢の流れと小鳥のさえずりと林を吹き抜ける風の音だけが快く耳にささやく。気のせいか、風の中にかすかに馬の鈴の音を聞く…。

いつの間にか中馬の古道に想いを馳せ、ふと、われに返って腰を上げる。

峠に近い「大曲り」の道端に一体の馬頭観世音が物静かに立っている。長い年月風雨にさらされて風化し、顔の彫りがはっきりしないが、右端の「天明」の文字ははっきり読みとることがで

きる。その姿に、時の流れをしみじみ感じ思わず手を合わせ一礼して再び峠に向かう。

やがて、天が開けて県道に合流し、それか

ら約300mほど歩いて大馬渡峠に達した。そこには石造物数体が並び、案内看板には「大馬渡峠の石仏群」と書かれていた。

往時は、この峠を一日に50頭ほどの馬が鈴を鳴らして往来したとか。時の流れに消えつつあった中馬の古道。今再び蘇り、木洩れ日に鈴の響きがこだまする。

〈交通のご案内〉



- 明知鉄道岩村駅より
町営バス又は、タクシーで20分
- 中央自動車道恵那I.C.より車で40分
- JR恵那駅より車で35分
- 猿投グリーンロード
力石I.C.より車で1時間10分



お問い合わせ

上矢作町教育委員会

岐阜県恵那郡上矢作町漆原44-2
TEL (0573) 47-2101 (代)
FAX (0573) 47-2124

